

PR

家族の団らんがはずむ住まいとは。子どもがすくすく成長できる間取りとは……。今、家族のコミュニケーションの観点から、住宅の間取りが見直されている。今回、集合住宅での新しい動きをリポートする。

家族間のコミュニケーションが取りやすい間取りとはどんなものなのだろうか。家族と間取りの関係性についての著作が多い建築家、横山彰人氏に話を聞いた。

「今、家族のコミュニケーションは基本から考えなおさなければいけない状態になっています。最近よくいわれているのが、子どもの成長にとって、子ども部屋はよいもののかという議論。今の子どもに欠けているのはコミュニケーション能力です。壁で仕切った子ども部屋は、そうした能力を育てにくいという考えが出来ました」

横山氏は、子ども部屋は寝るだけの狭い空間にし、勉強などは食卓やダイニングにつくる子どもコーナーで行けばいいと考えている。同じ空間で家族と一緒に学び遊ぶことが、コミュニケーション能力を培つからだ。

そしてその分、夫婦間の不十分なコミュニケーションを補うために、主寝室を広く取ることをすすめる。ベッドだけでいっぱいになるような狭い部屋ではなく、趣味も楽しめるような余裕ある空間でこそ、夫婦が本当に豊かな関係を築けるという考えだ。「夫婦を

の強い糸は、必然的に家族全体に良い影響を及ぼす」と横山氏は話す。

間

「もともとリビングは、歐米にならい来客時の接遇や家族のコミュニケーションの場として、日本の住宅に導入されました。しかし、日本の家庭は食卓を囲みながら団らんするというのが一般的で、リビングそのものが上手に使われていなかつたのです。さら

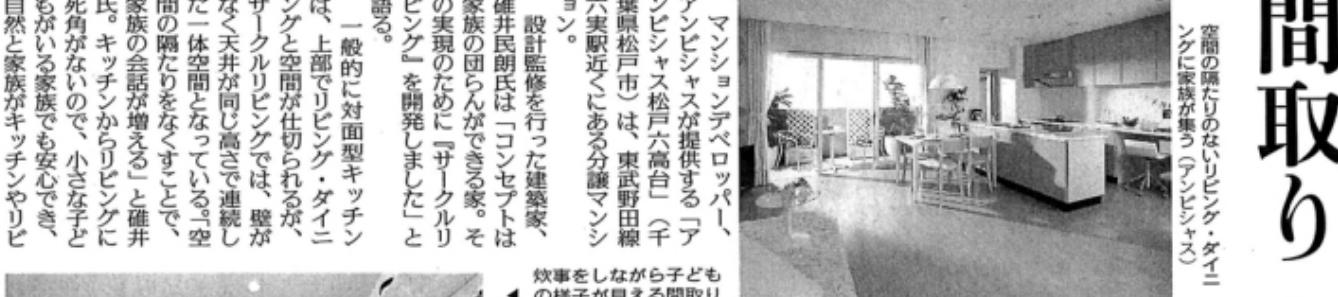
に仕切りのあるキッチンでは、調理をする主婦がリビングでの家族の会話に参加できなくなため、間取りを工夫しないといふ要望が増えてきました」(横山氏)

こうしたことを背景にして、オープンなりビング・ダイニング・キッチンの空間が好まれるようになつたと横山氏は分析する。

■事例1

隔たりない空間

実際に、家族のコミュニケーションを考えた間取りの事例を見てみよう。



炊事をしながら子どもたちの様子が見える間取り

空間の隔たりのないリビング・ダイニングに家族が集う(アンビシャス)

設計監修を行った建築家、碓井民朗氏は「コンセプトは、上部でリビング・ダイニングと空間が仕切られるが、サークルリビングでは、壁がなく天井が同じ高さで連続した一体空間となつていて、空間の隔たりをなくすこと」で、「家族の会話が増える」と碓井氏。キッチンからリビングに死角がないので、小さな子どもがいる家族でも安心でき、自然と家族がキッチンやリビ